

| | | | |
|------|---|---|---|
| 報告番号 | ※ | 第 | 号 |
|------|---|---|---|

主 論 文 の 要 旨

| | |
|------|--------------------------------|
| 論文題目 | 格交替を許容する日本語感情動詞の格体制 についての研究 |
| 氏 名 | 松野 美海 |

論 文 内 容 の 要 旨

本論文では、日本語の感情動詞のうち、「土産を喜ぶ」「土産に喜ぶ」のように、補語を表示する格助詞ヲとニの交替を許容する語について、意味的・構文的側面から、ヲ格をとる場合(以下、ヲ格例)とニ格をとる場合(以下、ニ格例)との差異、ヲ／ニ格感情動詞の特徴を明らかにするとともに、ヲ格、ニ格の機能を探った。

「喜ぶ」のような二様の格体制をもつ動詞(以下、ヲ／ニ格感情動詞)は感情動詞にいくつか見られる。ヲ格のみをとる感情動詞(以下、ヲ格感情動詞)、ニ格のみをとる動詞(以下、ニ格感情動詞)に関する振る舞い・特徴の指摘は先行研究においてなされるが、ヲ／ニ格感情動詞については存在の指摘や、限られた語の意味、文法的特徴について指摘があるのみである。本論文で二様の格体制をもつ動詞の抽出、ヲ格感情動詞とニ格感情動詞の特徴・性質との比較、ヲ／ニ格感情動詞の事例研究を行なった。具体的には以下の点が明らかとなった。

まず第2章で二様の格体制をもつ動詞の抽出を行ない、先行研究の指摘する動詞以外にも多くのヲ／ニ格感情動詞が存在することを指摘した。また感情動詞全体の文法的・構文的特徴を受身化・使役化、格形式との共起率、表出用法の有無から観察した。ヲ／ニ格感情動詞は概して、格交替を許容しない感情動詞のうち用例が偏る方に特徴・性質に近いものの、双方の特徴を有する語が多いことが明らかとなった。動作動詞との近似性に関しては、ヲ格感情動詞とニ格感情動詞との間に位置すると言える。

第3章では感情動詞のアスペクト的特徴と、ヲ／ニ格名詞が表す時間の差異について考察した。アスペクト的特徴については感情動詞全体を一括りにはできないことが明らかとなった。格形式とアスペクト的特徴の間には、ヲ格感情動詞が継続動作動詞、ニ格感情動詞が変化動詞という傾向が認められるが、その一方で、格形式とアスペクト的特徴が完全に対応するわけではない。またヲ格感情動詞、ニ格感情動詞双方の特徴を有する場合でも、用例の偏りからだけでは説明できない特徴を示す語もあり、事例研究の必要性も指摘した。

第4章では現代語「喜ぶ」を取り上げ、アスペクト的特徴と主体性・意図性の考察を行ない、事例の精査からヲ格例が節をとりやすく、事態性名詞も含めると、事態を明示的に表す名詞(句)への指向性が高いことを指摘した。これはヲ格例が概念的にまとめあげられた名詞をとりやすく、感情の生起を説明的に描写する用法があることに因ると考え、従来指摘のあったヲ、ニの別による予想性等の解釈の差異がこの点から説明できることを述べた。

第5章では、現代語「頼る」の様相と、中世から近代にかけての変遷を記述した。現代語「頼る」はヲ格例が中止形に偏り、その場合、移動動詞と共起しやすいが、ニ格例にはそのような特徴がないこと、ヲ格例では有情物や組織などのヒト名詞類が、ニ格例では非ヒト名詞が大部分を占めることを明らかにした。通時的考察においては、近世において移動を含意していた「頼る」が、近代に入って移動の意を表さなくなったことを示した。変化の結果、抽象名詞やモノ名詞をとるニ格例が移動の意を表さない用法を担った。一方ヲ格例は「頼る」自体が移動を含意しなくなった代わりに移動動詞と共起するようになり、もともとヒト名詞と共起しやすかった性質を引き継いだと指摘した。

第6章では「恐(れ)る」の中世和漢混交文における様相を記述し、ヲ格例が未実現事態に代表されるような確定性の低い事態を、ニ格例が眼前のモノに代表されるような確定性の高い事態をとることを示した。また中世から現代にかけての様相を概観し、現代語でも「～を恐れる」が名詞節をとる場合は未実現事態がほとんどを占めること、しかしヲ格例、ニ格例の双方がかつて他方の担っていた領域にも拡がり、ニ格例が少なくなっていることからヲ、ニの差異が見えにくくなっていることを指摘した。

これらの事例研究から、ヲ格が未実現事態にほぼ特化することもあれば、事態の実現が関与的なのはニ格選択においてであることもあるなど、ヲ格、ニ格の関係は固定的ではないことがわかる。しかし相対的に、ヲ格は概念化を経たものや補語として取り込みにくいものを文に取り込む形式であるのに対し、ニ格は即物的・即時的な名詞(句)の表示に現れやすいと言える。ニ格が感情生起の場と切り離しにくいということが、原因、手段、対象などの「意味役割」を担い得ることにつながるとした。ただしヲ、ニそれぞれがどこまでを担うか、どの領域を共有するかは語によって異なる。

